

香川県災害派遣チームでの南三陸町への災害派遣の経験

香川労災病院 栗田 和也

私は、3/19 から 3/22 までの 4 日間の日程で、香川県からの災害派遣の依頼を受け香川労災病院災害派遣医療チームの一員として宮城県南三陸町に赴いた。

今回の派遣チームは医師 1 名、看護師 2 名、薬剤師 1 名、事務職員 1 名の計 5 名の編成であった。

香川県からの派遣ということもあり、移動に丸 1 日費やした。空路東京に入り、そこからは車での移動であった。陸路での移動で、東北道に入ると一般車両は通行止めの状況にあり緊急車両のみ走行しており異質な雰囲気であった。幸い路上は損傷をほとんど認めておらず、予定通りに東北地方に入ることが出来た。

日程 2 日目に、南三陸町の現地に入った。町内に近づくにつれメディアを通してテレビ等で見ていた風景が眼前に広がり、胸が締め付けられる思いがした。町が存在していたと思われる場所は、全て瓦礫の山と化しており、山すその町の中心部からやや離れた高台の建物以外全てが津波により洗い流されていた。自衛隊が尽力され、車がやっと通れる程度の非常用の道をたよりに、まず本部のある南三陸町のベイサイドアリーナに到着した。この施設は、町の役場が津波により消失したために緊急の町役場の機能と、避難所を兼ね備えた施設であった。既に現地の医療チーム、他見からの医療チームなど多数の医療ボランティアの方々がおられみな懸命に活動されている様子が見てとれた。

我々が、2 日間行なった医療活動は、医療チームの本部から依頼を受けた南三陸町内に存在する避難所を回り、そこで避難されている方々の健康管理を行なうというものであった。我々が現地で活動したのは地震・津波発生から 10 日程度の日数が経過していたため、急性の外傷を抱えた方はほとんどおらず（おそらく近隣の医療施設への入院後）、慢性疾患（もともとの持病）への対応や、精神的な follow が中心であった。我々が訪問した避難所の方々は、家族や知人を亡くしたり、行方不明の状況にあったり、家がなくなったりと想像を絶する経験をされた方も大勢いたが、幸い、みなさん気丈に、しかもしっかりと前を向いて生活されていたことに驚いた。当初、スポット的な医療支援の立場にある我々が、被災者の方に何が出来るのか、非常に戸惑いを持ったまま現地に入ったが、被災者の方々の人間力により無用な心配に終わった。

今回の、東北関東大地震において、非常に短期間ではあるが災害派遣という形で現地に入り被災者の方々の診療を通し体験させていただいた経験は私にとってかけがえのないものとなった。極限の状況におかれていても、人々が支えあって生活する様は日本人の文化から培われた財産かもしれないと強く感じた。今回の経験を生かし、自分も忙しくとも日々大切に医療に携わるものとして思いやりのある診療を心がけていきたいと思う。

最後に、復興には莫大な時間がかかると思うが、1 日も早い東北の復興と、被災された方が早く安心して生活できる日が来ることを切に願う。